

映画におけるジェンダー構成 目次

序章	… 1
第一章 映画における女性像：アメリカ映画における女性像の変遷	… 5
1. 初期のアメリカ映画	
2. フィルム・ノワール	
3. 初期のアメリカ映画における女性の描き方を変えた要因	
第二章 1970年代から1980年代のアメリカ映画における女性の位置付け	… 8
1. 『エイリアン』における女性像	
2. アメリカ映画における働く女性	
3. 現代アメリカにおける社会的背景	
(1) 現在のアメリカにおける家庭状況	
(2) 仕事と家庭の両立に対する男女の意識の違い	
(3) 現代アメリカにおける離婚と再婚について	
第三章 現代アメリカ映画において描かれる女性像	… 12
1. 映画『グッドナイトムーン』について	
2. 現実的で真実味のある女性登場人物	
3. 家庭内の女性	
終章	… 18
参考文献・参考資料	… 19

終章
シヤンル

↓ 1970年代のジェンダー
カ?

序章

今日アメリカでは、ラジオがテレビと同様に影響力の大きいメディアの一つである。人々は、仕事や運転、料理、日光浴、ピクニックなどをしながら、一日約90分ラジオを聴いている。アメリカ家庭の91%が聴いていると言われるナショナル・パブリック・ラジオは、その専属記者の半数以上が女性であり、ニュースや人気のトーク番組を担当する女性キャスターや女性プロデューサーも増えている影響もあり、人気番組の多くが女性により書かれ、制作され、放送されている。

テレビ業界においても女性の活躍が目立つようになった。アメリカの主要テレビ・ネットワークの最高経営責任者や取締役は圧倒的に男性が多い。しかし、中間管理職では女性達が急増している。1980年代末には、アメリカテレビ局のライターとアナウンサーは約25%で、中間管理職の35%から50%が女性だった。1995年の国連調査によると、西欧とラテンアメリカでは、テレビ・アナウンサーのほぼ45%が女性で、ドイツ・ニュージーランド・アフリカ・ラテンアメリカのテレビ・プロデューサーの35%から40%は女性であった。彼女達の台頭もあり、現在アメリカドラマの女性登場人物は、男性から見た女性ではなく、医師や法律家、刑事など教養があり、有能な女性として描かれ始めた。

新聞の内容も、女性ジャーナリストの趣味や姿勢が紙面を変えつつある。健康や家族、ホームレス問題など、女性に関心を持つような社会問題が取りあげられるようになってきた。(ヘレン・E・フィッシャー 2000:124)

このように、現代アメリカではメディアにおける女性の描き方が変化している。その背景には、長年にわたって男性によって支配されていたメディア業界に、多くの女性達が参与し始めたからである。そして現在、メディアに進出した女性達は、かつてメディアが男性に支配され、男性の視点から描かれてきた数多くの女性像のズレを少しずつ解消してきている段階なのである。

メディアが男性により支配されると、男性の視点から描かれた、偏ったイメージが、人々の意識に影響を及ぼすことになる。例えば、ソフォクレス・シェークスピア・イブセン・チューホフなどの多くの偉大な劇作家は男性であった。そのため、かつては男性の視点から創り出された物語が主流となり、それが「自然」なものとなっていた。女性とすれば、偏った見地から描かれた物語を受け入れざるを得なかったのである。

(ヘレン・E・フィッシャー 2000:119)

、行-ア-27-
、へ-ア-エ-

空-ア-ア-ア-
ア-ア-ア-ア-
ア-ア-ア-ア-

メディアが私達に働きかける影響は大きい。例えば、ジェンダーは「男性」「女性」という生物学的な違いのみならず、私達が日常生活の中で創り上げた認識も大きく関与している。メディアによって描写された男性と女性の描写が、偏ったイメージの中で描かれる場合もある。例えば、1975年日本で製作されたテレビCMのキャッチコピーは、「私作る人、僕食べる人」というように、女性達が料理をし、男性達は女性の作った料理を食べるという男性と女性の性別役割を規定することになる。(村松, ヒラリアゴスマン 1998:2) このように、偏ったイメージがメディアによって描かれるため、私達がメディアによって描かれたイメージ全てを、現実認識として捉えることには問題がある。映像や情報を発信するメディア側は、表現しようとする題材や情報を、選び取って私達に提供する。そのため、日々膨大な情報を私達に流すメディアによって描かれたイメージは、人為的に形成されたイメージであると言っても過言ではない。そのメディアによって提供された情報は一つの視点に過ぎないため、私達はメディアから得る情報について、本当に正しい情報として認めることができるのか、常に吟味しなければならない。

かつてのアメリカ映画では、男性の視点から見た女性の姿が描き出され、女性達の位置付けは規定されていた。例えば、初期のアメリカ映画に代表される西部劇映画の中では、女性を邪魔者として描き、フィルム・ノワールと呼ばれるアメリカの映画ジャンルでは、女性は、自分のセクシュアリティを武器にして男性世界に入り込む危険な存在であり、女性を家族や男性に依存する存在であると位置付けた。

しかし、今日様々な国に輸出されているアメリカ映画における女性像は、急速に多様化している。『チャーリーズエンジェル』や『トゥームレイダー』の中で描かれる女性達は、男性の力を必要としない、自立し強い意志を持つ女性として描かれ、『ハート・オブ・ウーマン』では、女性は男性に劣らず有能な存在であると位置付けた。好評を博し、現在第二作まで製作されている『キューティーフロンド』では、多くの人々の偏見を打ち壊していく女性をヒーローのように描き出し、『アンカーウーマン』では、男性中心の会社組織で働き、悩みや葛藤を乗り越えた女性に名声を与えている。

このように、今日現代アメリカ映画において、女性の描かれ方が多様化しているのはなぜか。映画における女性像の位置付けが変化する中で、その変化のいかなる社会的な背景と、何が連動しているのか。かつて、男性の視点から描かれていたアメリカ映画における女性像は、現代アメリカ映画においてどのように変化したのか。

人々の現実認識や意識形成に大きく影響を及ぼすテレビや新聞、ラジオ、本、映画とい

ったメディアの中でも、マーケット市場において大きな割合を占め、マーケットと直結する映画産業は、莫大な制作費がかかり観客の参与を得ない限り成立しない。映像を売り出し、商品化するという試みは、1895年に映画の発明と同時に成され、現在でも、映画は一つの産業を形成し、成り立っている。映画が産業として成立した背景には、人々のニーズが大きく関係する。映画産業においてマーケットを拡大するためには、映画のジャンルを増やし男性と女性の双方に支持される多様なテーマを扱うことが必要不可欠である。

かつて、映画産業は男性を観客の対象としていたため、男性向けの映画が製作されていた。それから、マーケット拡大のために女性観客の動員を図るようになった。女性観客を多く動員するためには、女性向けのテーマを用いることが必要になり、そして現在数多くの映画ジャンルが確立されている。確かに、多くの映画評論家達により初めて成功したフェミニズム映画であるとされている『エイリアン』など、多くのフェミニスト達により高い評価を与えられた、非現実的世界の中で描かれた男性の力を借りず、自立し強い意志を持った女性は、仕事と家庭における子育てや育児に悩み、葛藤し不満を抱えている現実の女性達の姿とはかなりのズレがある。一方、現在アメリカ映画においてより現実的で真実味のある女性を描き出している映画が、新たな女性像として人々に認識されている。

しかし、1960年以降のフェミニズム運動で、女性達によって男性の視点から描かれた女性像が批判され、映画産業が男性に加えて女性達を観客対象とすることでマーケットを拡大するための努力がなされるようになった。このフェミニズム運動の影響もあり、1979年に製作された『エイリアン』では男性の力を必要としない自立し、強い意志を持った女性が描かれ、フェミニスト達によって初めての「ジェンダーフリー」ヒロインとして絶賛された。それから1980年代以降、女性が劇的に社会進出を成し遂げ、メディア業界に女性が参与し始めたことや、映画産業が観客の動員数を増やし、マーケット拡大を試みたことから、現在、映画におけるジャンルや描かれるテーマは様々で、映画における女性像も多様化している。

本論文の目的は、かつて男性の視点により位置付けられていた初期のアメリカ映画における女性像や、『エイリアン』の中で描かれた、男性の力を借りず、自立した女性像、そして現在アメリカ映画において新しく描かれ初めている女性像について、アメリカ映画の歴史をたどりながら考察し、最近の女性達をより現実的に描き出す映画の一群が、一つのジャンルとして確立しつつある点を指摘することにある。

第一章では、初期のアメリカ映画において、男性の視点から描かれ規定されていた、画

一的な女性像を考察し、男性の視点から描かれていた女性像を変化させた要因を探る。

第二章では、多くの映画評論家により、初めて成功したフェミニズム映画と評された『エイリアン』の中で描かれていた女性像と、『エイリアン』と同時期に製作され、女性が働くことそのものがテーマとされた映画の中で描かれた女性像を考察し、現代アメリカ映画において、現実的で真実味のある女性を描き出した、現代アメリカの社会的背景を考察する。

第三章では、現在新しい映画ジャンルを確立し、現実的で真実味のある女性像を描き出した映画の一つ『グッドナイトムーン』の分析により、現代アメリカ映画において描かれる新しい女性像について探り出す。

第一章

映画における女性像：アメリカ映画における女性像の変遷

1. 初期のアメリカ映画

テレビや雑誌、ラジオや映画といったメディアの中でも、映画は莫大な制作費がかかるため、映画製作者は映画を有料公開して、映画の製作資金を回収する。この原則は、映画を発明したと言われるルイ・リュミエール兄弟が、1895年に映画を有料公開した時から続いている。映画製作者は、観客に受け入れられる映画を製作し、観客動員を図る。観客達は、映画を観るためにお金を支払う。そのため、映画はマーケットと直結し、観客の支持を集めヒットした映画はその時代や社会、人々の考え方や意識を反映すると言われている。

(内田 2003 : 32) かつての映画生産工場ハリウッドは、初めはただの農地であったが、1917年シカゴで映画製作をしていたディレクターが、映画作りに適した風景や天候を求め、南カリフォルニアに位置するハリウッドを映画製作の場所として選んだ。その後、同じ様に映画製作に適した環境を求め、主要映画会社がハリウッドに集結した。その当時製作されていたアメリカ映画は、フランスやイタリアの冒険活劇の主人公が全て男性だったのに対して、女性主人公による連続冒険活劇だった。その中でもヒットした『ポーリーンの危険』シリーズの主人公パール・ホワイトは、スタントなしの捨て身のアクション（崖から落ち、落馬し、気球から飛び降りるなど）で評判を呼び、『ヘレンの冒険』シリーズの主人公ヘレン・ホームズは、列車を追いかけて飛び降り、列車を停止させ、男性ヒーローのように演じ、常に意志が強く、独立した才能豊かなヒロインを演じた。(同上 : 235) このように、女性を男性ヒーローのように描く傾向が 1920 年代半ばで終わり、ハリウッド映画は西部劇全盛期に入り、女性主人公の映画が一掃された。その当時、定義付けられていたストーリーは、男のテリトリーに侵入してきた女性が、複数の男性の欲望対象となり、男性世界の秩序を揺るがし、男達の団結を破壊する。そのため男達は女性を排除し、男性世界の元の秩序を取り戻すというものだった。例えば、トム・ミックスの『彼女をロープで捕まえて』では、二人の陽気なカウボーイが牧場主の娘に恋をするが、二人ともふられて、娘がろくでもない男と連れだって去るのを見て、男同士の友情を回復するというものであった。(同上 : 222) このように、初期のアメリカ映画ではヒーロー的な役目を与えられていた女性は、西部劇映画では男性世界の秩序を壊す邪魔者として位置付けられた。

2. フィルム・ノワール

アメリカ映画における女性の位置付けを考察する際に注目すべき点は、1941年から1958年に表れたフィルム・ノワールと呼ばれるアメリカの映画ジャンルの存在である。この映画ジャンルは、主人公が女性で、結婚や家庭生活、出産、養育など、女性の諸問題をテーマとした女性対象のメロドラマとは対照的で、女性が男性にとって危険な欲望の対象とされ、男性が目標を達成するためには、女性達が障害物になると位置付けられる男性向けの映画ジャンルである。(E・アン・カプラン 1988 : 119) フィルム・ノワールの映画では、カメラの焦点が女性の肉体に向けられて、女性のセクシュアリティが男性にとっては危険であり、女性は家族や男性に依存する存在であると位置付けた。そのため、女性が経済的に自立するためには、自ら仕事をするか、自分のセクシュアリティを売り物にするかという選択肢のみしか与えられないため、フィルム・ノワールの映画の中で描かれる女性のほとんどは、バーやナイトクラブで働く女性であった。(同上 : 10) このように、女性達を邪魔者にし、女性は自分のセクシュアリティを武器にし、男性の欲望を脅かす危険な存在であると位置付ける映画は現在でも残っている。例えば、アメリカの俳優マイケル・ダグラスが出演している多くの映画では、女性達が悪者として描かれる。彼の出演する映画の中で女性達は、自分のセクシュアリティを利用し主人公を誘惑し、主人公の自己実現を妨害し、彼の大切なものを破壊し、プライドをずたずたに切り裂いていく。最後は怒りに満ちた主人公によって女性達は抹殺される。この映画におけるテーマは、女性は一見すると被害者のように見えるが、実は加害者であると定義することである。(内田 2003 : 220) 1994年アメリカで製作された『蜘蛛女』も同じ様な構造が見られる。殺し現場や張り込み、同僚らとの付き合いの日にあき足らず、マフィアに警察の情報を売り込むアルバイトをしている、万年巡査部長の警察官ジャックは、妻と二人暮らしをしている。ジャックは、アルバイトの報酬で若い愛人を囲い、報酬の残りを家の裏庭に埋めている。ジャックの悪徳警察官人生は、女性凶悪犯モナとの出会いによって変わっていく。逮捕したモナを護送中にジャックは、引渡し場所のホテルでモナの性的挑発に応じてしまい、その間に FBI に踏み込まれてしまうのである。この映画では、屈辱感にすくむジャックとは対照的に、勝ち誇って高笑いをしているモナの姿が描き出されている。(松本 2000 : 20) ここに、男女関係における男=被害者、女=加害者という構造が見られる。このように、男性の性的欲望に付けこみ男性を悪の世界へと誘い込むフィルム・ノワール的な女性の位置付けは、現代アメリカ映画の中にいまだ残っている。

3. 初期のアメリカ映画における女性の描き方を変えた要因

西部劇映画やフィルム・ノワールに代表される初期のアメリカ映画のように、男性の視点から女性の位置付けを規定する傾向を変化させた要因の一つとして考えられるのは、1960年代に起きたアメリカにおけるチカーノ・ナショナリズム、アメリカンインディアン運動、有色人女性運動、レズビアン・ゲイ運動である。さらに、第三世界の国々で起きた国家開放運動や脱植民地化運動も、アメリカ国内の社会闘争に影響を与えた。これらの運動に関与していた女性運動家達は、メディアが女性にステレオタイプのイメージを与え、助長するとし、メディアにおける女性像が男性の視点により規定されることを強く批判した。そして彼女達は、男性中心主義の中で、抑圧されていた女性達の声を聞き入れ、映像の中で、女性のポジティブなイメージを創り出し、世間に向けて発信した。その中でも、マルグリッド・デュラス、シャンタル・アケルマンなどの女性映画作家達は、アヴァンギャルド・フェミニズムと呼べる映画を創り出した。(斎藤 1998 : 121) さらに、フェミニスト映画理論を代表する論文『視覚的快楽と物語映画』の著者ローラ・マルヴィは、ハリウッド映画の中で「見る人=男性、見られる人=女性」という図式が存在することを明らかにし、ハリウッド映画がいかに男性向けに製作されているのか、さらに男性により映画が製作されることで、いかに男性中心主義の考え方が「女性」の存在を規定しているのかを批判した。(同上 : 122) 従来の男性を観客対象とし、男性の視点からなされていた女性の位置付けが、これらのフェミニズム運動を基に変化し、女性が観客の対象とされるようになる。(内田 2002 : 145) 例えば、1979年に製作され多くの映画評論家達により、初めて成功したと言われている『エイリアン』の中で描かれた女性主人公は、男性達により抑圧された女性ではなく、男性の力を必要としない、独立し強い意志を持った女性として描かれた。

第二章

1970年代から1980年代のアメリカ映画における女性の位置付け

1. 『エイリアン』における女性像

第二次フェミニズム運動の絶頂点で、フェミニズム運動終焉の時に製作された『エイリアン』は、多くの映画評論家達により初めて成功したフェミニズム映画であると言われている。『エイリアン』は、宇宙船ノストロモ号の乗組員達が地球へ帰還する途中で、ある星から信号を受信し、その発信先を求めて宇宙船ノストロモ号の乗組員達は、見知らぬ星にたどり着く。そこで化石化した宇宙船と異性人乗員の死骸を発見し、その宇宙船の船底に、孵卵器のような物に守られた幼生の生物の存在を知ることになる。

乗組員のケインが、その孵卵器に顔を近づけると、蟹のような生物が彼の顔に飛び掛かり、そのまま付着する。ケインの顔に付着した生物は強酸性の体液を分泌するため、ケインの体からその生物を切り取る事は不可能である。やがてその生物はケインの体から剥離し、ケインは猛然たる食欲を発揮する。その後でケインは、激しい腹痛を訴えのたうち回る。そのケインの体を突き破り、蛇状に変化したエイリアンが彼の体から出現する。謎の生物エイリアンは、次々と乗員達を殺し、最後に残った女性航海士リプリーと一対一の闘いを迎える、というものである。(内田 2003 : 57)

この映画の女性主人公リプリーは、白馬の王子様の救援を待たず自力でドラゴンを倒す、「自立した」お姫様である。リプリーには上級仕官が不在の時の指揮権が与えられ、いかなる危険な任務も厭わない。彼女にとって「女性であること」は、利益でも不利益でもないと描かれ、多くのフェミニスト達により初めて造形に成功した「ジェンダーフリー」ヒロインと位置付けられた。『エイリアン』の中で描かれた女性像は、後のアメリカ映画における「男性の暴力に対して決して屈しない、自立し自己決定するヒロイン」の原型となる。

(同上 : 60)

このように『エイリアン』では、宇宙船の中で女性が一人で謎の生物エイリアンと闘うという非現実的な世界での女性の姿が描き出され、男性の力を必要としない、自立し強い意志を持つ女性の存在を位置付けた。『エイリアン』の中で描かれた男性の力を必要としない自立した女性像は、現代アメリカ映画の中でも見られる。例えば、アメリカの人気ドラマを映画化した『チャーリーズエンジェル』では、正体不明のボスに雇われている三人の女性探偵達がボスの命を狙う敵と闘い、男性に引けを取らない力強さを見せている。また、

『トゥームレイダー』の女性主人公は、男勝りな身のこなしにより、女性らしさを感じさせない。彼女は、敵となる男性達とアクションを交えながら闘い、力強い女性として描かれている。

2. アメリカ映画における働く女性

『エイリアン』とほぼ同時期には、アメリカ映画において初めてキャリアウーマンが登場し、女性が働くことをテーマとした映画が製作され始めた。その中で仕事のキャリアを成功させた女性はたいてい独身で、『エイリアン』の中で描かれていた女性主人公と同様に、男性の力を必要としない自立し、強い女性だった。しかし、仕事に生きる女性は、仕事の成功と引き換えに愛と結婚を諦めなければならないという図式の中でしか描かれていなかった。

1980年以降女性達は劇的に社会進出を成し遂げ、女性達の間では自分達の人生を確立するために家庭を捨てるという新しい考え方が広がり、女性達は多様な生き方を探り始めた。それに伴い男性の価値観や人々の家族観も変化し始めた。このような社会的背景から、1980年に製作され大ヒットした『9時から5時まで』では、横暴で好色な上司を力を合わせて打ち負かす女性達の姿が描き出された。さらに1988年に製作された『ワーキングガール』で描かれた女性は、従来の職場の男女差別や性的嫌がらせに力を合わせて“抵抗する”OL像ではなく、女性管理職という地位を自分一人の力で“勝ち取る”OL像へと変化し、社会的地位も向上した。

『エイリアン』や『9時から5時まで』『ワーキングガール』の例で見られるように、1970年代後半から1980年代後半の映画の中で描かれる女性達は、男性の力を必要としない自立し、強い意志を持つ女性として描かれた。このような画一的な女性の描き方は、映画産業のマーケット拡大のために、女性達が観客の対象とされ始めたことから、~~現代映画~~において描かれる女性像は多様化している。現代アメリカ映画では、女性の教育や雇用問題・性関係・結婚や離婚など、女性達が直面している現実的な問題が取りあげられるようになり、一つの映画ジャンルが確立されつつある。(内田 2002 : 145)

3. 現代アメリカにおける社会的背景

現代アメリカ映画において、女性達が直面している現実的な問題が取りあげられ、女性達の描かれ方が多様化し、一つのジャンルが確立しつつある要因としては以下のことが挙げ

げられる。

(1) 現在のアメリカにおける家庭状況

現在アメリカの家庭では、子供が学校から帰ると母親が家にいるという恵まれた子育て環境で育つ子供は20%である。ワーキングマザーの割合は1940年には9%、第二次世界大戦後の1955年には27%、70年代から86年までに61%に達した。そして現在、子供を持ち働く女性の割合は、全労働者の67%に達している。女性達はこれまで続けたキャリアを止めるわけにはいかず、働かなくてはやっていけないという理由で、子供を持ち働いているが、子供と過ごす時間が短いことに対して罪悪感を抱いている。アメリカには、公立・私立の託児所や保育園が少なくベビーシッターを雇う家庭も多い。現在アメリカ女性の中で働く女性と専業主婦の割合を見ると、両親共に常勤の共働き家庭は約23%、父が常勤で母親が非常勤の共働き家庭は約11%である。一方専業主婦は21%で、共働き家庭が非常に多い。(ヘレン・E・フィッシャー 2000:120)

(2) 仕事と家庭の両立に対する男女の意識の違い

女性は、男性よりも仕事と家庭を両立したいと考える傾向がある。1989年のニューヨークタイムズの世論調査によると、両親のうち働く母親の83%が仕事と家庭の両立に苦勞していると答えた。父親の場合は72%であった。この母親と父親の意識の違いは、仕事におけるキャリアを求めることによって生じる犠牲が、女性の方が多いためである。実際に、30代半ばまで出産を延ばす女性も多く、仕事に集中するため子供の数を制限する女性もいる。上級のポストにいる女性は子供を持たないケースが多く、子供を持つ多くの女性達が長時間、子供達の保育を誰かに頼み、遅くまで働いている。(ヘレン・E・フィッシャー 2000:87) 一般的に女性達は男性よりも残業や出張、学校の行事への欠席、夜の接待や転勤を好まず、キャリアのために家庭生活や個人的な時間を犠牲にしないと言われている。しかし、女性の社会進出はますます増えている。女性達の教育水準も上がり、女性達の仕事におけるキャリアに対する期待も大きくなっている。企業側は女性のニーズを真剣に考え、フレックス・タイムなどの制度を提供し、仕事と家庭の両立の便宜を図るようになってきた。現在アメリカの一部の企業では、女性の持つ柔軟性や協調精神が求められている。従来働く女性達は多くの犠牲を払わなければ、会社内で最高地位にのぼることが難しいとされていた。しかし今後、会社内で最高位に就く女性達は増え続けると言われている。(ヘレン・E・フィッシャー 2000:89)

(3) 現代アメリカにおける離婚と再婚について

アメリカでは、1960年代から1980年代までに働く女性達が増え、離婚率も倍増した。そして現在アメリカでは、結婚したほぼ半数が離婚すると言われている。それは働く女性が増えただけではなく、男性が経済的に自立できる妻であれば、経済的な面で男性に頼るしかない妻よりも簡単に別れる傾向があるためである。離婚の主な原因としては、夫婦の出身が違う場合・関心や目標の違い・若年結婚・夫婦の年齢差・肉体的魅力に関するものなどがあり、教育水準が高い女性は離婚しやすいと考えられている。再婚については、アメリカの結婚経験者のうち、30歳未満の75%の女性、30代の女性では50%、40代では28%の女性が再婚している。全ての年齢の平均では、離婚した女性の72%男性は80%が再婚している。(ヘレン・E・フィッシャー 2000:209)

このようなアメリカの社会的背景の影響もあり、現代のアメリカ映画においてより現実的で真実味のある女性の姿を描いた映画が、新しいジャンルを確立しつつある。

第三章

現代アメリカ映画において描かれる女性像

1. 映画『グッドナイトムーン』について

第二章で述べた、現代のアメリカにおける社会的背景を見てもわかるように、仕事と家庭生活の両立を図る女性達が増えている。そのことを受け、現代のアメリカ映画において描かれる女性像は多様化している。『エイリアン』や『9時から5時まで』『ワーキングガール』で描かれた、自立し強い意志を持った女性に加え、現在アメリカ映画では、より現実的な女性の姿が描かれるようになってきた。

1998年アメリカで製作された『グッドナイトムーン』は、実母と継母の心の葛藤を描いた作品である。この映画では女性達の子育てや仕事、家庭における悩みや不安、葛藤など現代女性達が抱えている現実的な問題が詳細に描かれているため、多くの女性達の共感を呼ぶことができた。『グッドナイトムーン』の舞台はニューヨークで、売れっ子のファッション・フォトグラファーのイザベルは、弁護士のルークと恋に落ち同居生活を始める。しかし、彼には3年前に別れた妻ジャッキーになついている二人の子供アンナとベンがいた。イザベルは、ジャッキーと交替で子供達の世話を始めるが、子育ての経験もなく仕事に追われるイザベルは、完璧な母親だったジャッキーとは違って失敗ばかりする。しかしイザベルは、ジャッキーがガンに冒されていると知り、ふたりは協力して子育てをしながら少しずつ打ち解けていく。初めは子供達に嫌われていたイザベルが、徐々に母親として子供達に受け入れられる。そして、イザベルは多くの苦難を乗り越えて家族の一員になるというストーリーである。映画ではニューヨークを舞台に家族の在り様を探り、女性の生き方と新しい家族像が描かれている。この映画における登場人物や場面設定、セリフ分析により、現代アメリカ映画の中で描かれる、より現実的で真実味のある女性について考察する。

2. 現実的で真実味のある女性登場人物

『グッドナイトムーン』の中では、女性の雇用問題・性関係・結婚や離婚・再婚などの現代女性が抱えている現実的な問題が取りあげられた。『エイリアン』や『9時から5時まで』『ワーキングガール』の中で描かれていた男性の力を必要としない自立し、強い意志を持った画一的な女性の描き方が、『グッドナイトムーン』の中では、より現実的で真実味のある女性として描かれている。

『グッドナイトムーン』の物語は、寝坊した義理の母親イザベルが、7歳になる義理の子供のベンを起こすという日常的なシーンから始まるが、いたずらっ子のベンは、すでにベッドから抜け出していた。イザベルは、朝早くから家中を駆け回りベンを探す。イザベルは、ベンを探しながら12歳の娘アンナを起こしに行く。

イザベルがアンナの部屋に入ると、アンナはすでに起きている。しっかり者で、義理の母親を自分の母親として決して認めないことを心に決めているアンナは、常にイザベルに嫌味を言う。アンナは、イザベルが自分の部屋に入ると同時に、いじわるな事を言いイザベルを困らせる。この日アンナは、紫のTシャツを着て学校へ行く日と決めていた。アンナは事前に、イザベルに紫のTシャツを着ていくと言っておいた。しかし、紫のTシャツはまだ洗濯されていなかった。アンナは「紫のTシャツがない。」と洗濯を忘れたイザベルを非難する。イザベルは、「洗濯を忘れていた訳ではなく、アンナに似合うのはオレンジ色の服だと思ったの。」と言い、すっかり紫のTシャツを洗濯するのを忘れていたことを弁解する。イザベルの言い訳を聞いて、アンナはすっかりあきれている。イザベルはベッドから抜け出したベンを見つけ出せないまま、子供達のお弁当を作り始める。この日のお弁当は、パンである。お弁当用のパンにピーナツバターを塗るため、戸棚の扉を開けるとそこにはベンが隠れていた。イザベルは悲鳴をあげて驚く。アンナはイザベルが驚くのを見ながら楽しんでいる。ベンを見つけたイザベルは、ベンのパジャマを着替えさせるため、逃げ回るベンを捕まえて、力任せにベンの服を着替えさせようとする。その時玄関のベルが鳴り、子供たちの母親ジャッキーが子供を迎えに来ていた。実母のジャッキーは力任せにベンの服を脱がせようとしているイザベルの姿を見て唾然とする。子供達の母親であるジャッキーも、娘のアンナと同様にイザベルを嫌っている。ジャッキーは、自分の夫の愛人であるイザベルに敵意を抱いているため、イザベルが子供達のために作ったお弁当をごみ箱に捨ててしまう。

フォトグラファーの仕事をしているイザベルは、朝の一騒動で仕事に遅れてしまう。そのため撮影スタッフや、クライアント、モデル達は怒っている。彼女が仕事に遅れるのは日常茶飯事であることを知っている彼女のアシスタントは、怒るクライアントやモデル達を宥めるために謝って回る。予定より一時間遅れてイザベルは出社する。イザベルは、仕事に関しては実力を認められていて、重要な仕事を任されている。上司は一時間遅れて来たイザベルを注意するが、フォトグラファーとしての彼女の才能を高く評価している上司は、彼女が遅れて来たことを甘くみてしまう。

しかし、イザベルの遅刻はとどまることなく続きフォトグラファーとしての彼女の實力も落ちていく。そんな時イザベルの仕事場に子供達の学校から電話が掛かってくる。電話の内容は、迎えの人が来ないから子供を迎えに来て欲しいという要請であった。すぐに子供を迎えに行こうと仕事を抜け出そうとするイザベルに対して、上司は子供の迎えを優先するのなら仕事を首にすると告げる。イザベルは、子供の迎えを優先したために仕事を辞めさせられてしまう。

この映画では、現代のアメリカ女性達が抱えている子育てと仕事を両立する女性達の不満や葛藤、価値観までもが詳細に描かれている。職場では、仕事をきちんとこなす事が求められる。一方、家庭では母親の仕事をしっかりとこなす母親が求められるという現状で、より現実的で真実味のある女性登場人物が描かれている。映画の中では、フォトグラファーの仕事と家庭生活の両立を試みるイザベルが、結局育児のために会社を辞めざるを得なかった。しかし現在アメリカの企業は、女性の力を必要としている。女性達が仕事と家庭の両立を図れるような制度が整ってきている中で、イザベルのように育児のために会社を辞めなければならない女性達は、今後減ってくるのではないだろうか。

3. 家庭内の女性

現在アメリカ映画で描かれる現実的な女性として、家庭の主婦達にも焦点が当てられている。この映画の女性主人公ジャッキーも家庭での仕事を完璧にこなす専業主婦の一人である。現在アメリカでは仕事と家庭の両立を図る女性が増えているが、家庭において家族を支える専業主婦の存在も忘れてはならない。専業主婦には報酬は支払われないが、家族を支え仕事をしている女性と同様に不満や悩みも多い。しかし現状では、専業主婦が社会全体に認められていないことから、ジャッキーは現代アメリカの専業主婦達の代弁者となり、言及している。そのことが表れている場面を分析する。

ある週末の土曜日、娘のアンナは実母のジャッキーと過ごせるのを楽しみにしていた。しかしジャッキーは都合が悪く、子供達はイザベルと週末を過ごすことになる。イザベルは仕事があるため、やむなく子供達を仕事場に連れて行く。イザベルは、セントラルパークでの写真撮影をしている。子供達は退屈そうにイザベルの仕事ぶりを眺めている。すでに5時間もイザベルの仕事ぶりを眺めている子供達は退屈し、イザベルに「お腹が空いた」と不満を言う。イザベルは子供達にお財布を渡し、アイスクリームを食べているように言う。仕事を終えたイザベルがアンナの所に行くと、アンナは公園で寝てしまっていた。ア

ンナが寝ている間に、ベンがどこかに行ってしまう行方不明になる。必死に探すアンナとイザベルだがベンは見つけれない。結局ベンは警察に保護されていた。ベンが警察に保護されている事を知り、急いで子供達の実母ジャッキーが警察に駆けつける。父親のルークはすでに警察に来ていた。実母のジャッキーは、イザベルの謝罪を聞き入れず、父親のルークに不満をぶつける。怒るジャッキーに父親のルークはうんざりしている。ジャッキーは父親のルークに「イザベルに二度と子供達を預けないで」と怒鳴りつける。ジャッキーは子供が変質者にさらわれることや、イザベルが子供達から目を離し、危険な目に晒されるのではないかと心配している。父親のルークは、イザベルも反省しているためイザベルを許してあげるようジャッキーに言うが、子供の事となると冷静でいられないジャッキーは決して聞き入れない。遂にジャッキーはイザベルに「子供は私が守るわ。二人はあなたが嫌いよ。私の許可なしに子供達に会わないで」と言い、子供を引き連れて家に帰る。ジャッキーと子供達はアンナの乗馬教室に行き、親子三人で馬に乗りながらその日のことについて語り合う。その場面における会話である。

ベン：「ママ、イザベルは悪くないよ。」

(ベンは、イザベルが仕事をしている時にいなくなり、警察に保護されていたことについて、ジャッキーにイザベルが悪くないと告げる。)

ジャッキー：「悪いのはお前だけど、子供を守れなかった彼女も悪いわ。大切な仕事なのに。」
(子供から目を離して、子供達を危険な目に合わせたイザベルを非難する。)

ベン：「イザベルはお外で仕事だ。」

(フォトグラファーとして働くイザベルに対して評価しているベン)

ジャッキー：「母親の仕事も大変よ。外で働くよりもキツイし、お給料はゼロよ。」

(“主婦”という仕事は、お金はもらえなくても、外で仕事をしている女性達と同様に大変であると教える。主婦の仕事はなかなか周囲の人たちに理解してもらえないという不満を言う。)

アンナ：「彼女はお金持ち？」

ジャッキー「彼女みたいな自己中心型はたいてい高給取りよ。」

(仕事で成功している女性達は、給料だけは高い。しかし主婦としてきちんと仕事をこなすことも大変だということを教えている。)

ベン:「(イザベルは)美人だよ。」

ジャッキー:「口は大きいけど。」

ベン:「ママ、彼女を嫌いになろうか。」

(ジャッキーは、社会的に認められてきている働く女性に対して、自分が不平や不満を持っていることに気付かされ、呆然とする。)

この映画の舞台となっているニューヨークで生活する中流階級の子供達は、サッカー・空手・体操・音楽教室・語学・スキー・水泳・エアロビクス・バレエなどの習い事をしていて、ぎっしりと予定の詰まった生活をしている。映画の中でも12歳のアンナは、乗馬教室に通っている。子供が習い事をしているためベビーシッターか母親は、犯罪を逃れるために子供達を送り迎えしなければならない。このような日常的な母親の仕事は、社会全体に認められていない。そのため現在アメリカでは、専業主婦同士の支援グループもできている。(千葉 1987: 38) 家庭にいる専業主婦達は、同じ環境にある女性同士で支援し合わないと、自尊心も失いがちになってしまう。このような現状により、『グッドナイトムーン』では、悩みや不満を抱える主婦の姿を描き出し、より現実的で真実味のある女性登場人物を描いている。

このように現在アメリカ映画では、女性達の抱えている悩みや葛藤、不安を詳細に描き出した作品が増えつつけている。例えば、『エリン・ブロコビッチ』の主人公は、二回離婚し三人の子供を抱える独身女性で、彼女は弁護士事務所に勤め、コピーとりやファイル整理をしている。彼女は、住民達の原因不明の体調不調に疑問を持ち調べ上げ、その原因として巨大企業の有害物質クロムの使用隠蔽が関係していることを探り出した。この映画では、事実を隠蔽した企業側からの嫌がらせを受けながらも逞しく行動する彼女の苦労や、女性が、仕事と子育ての両立を図ることの難しさを描き出している。『ハート・オブ・ウーマン』は、広告市場の大部分を女性向けの商品が占めていることから、大手広告会社において女性達の力が必要とされていることを描き出した。『モンタナの風に吹かれて』は、乗馬中の事故により片足を失ってしまった娘を持つキャリアウーマンの母親が、娘と向き合

い、仕事を中心に家庭を顧みなかった為にできてしまった娘との距離を埋めていく母親の姿を描いた。派手な服装と厚化粧のため、雑用係の仕事しか与えられなかったアンカーウーマンを目指す女性が、トップアンカーとして世間に認められるまでの努力や葛藤を描いた『アンカーウーマン』、“金髪女性は頭が悪い”という偏見を打ち壊していく金髪女性の奮闘を描き出し、好評を博した『キューティープロンド』など現代の女性達が抱えている現実的な問題が取りあげられた映画が、一つのジャンルを確立しつつある。

このような女性達の抱えている現実的な問題に焦点が当てられ、映画においてより現実的で真実味のある女性の姿が描かれるようになった背景には、映画というメディア業界に多くの女性達が参入し、かつて男性の視点から描かれていた画一的な映画における女性像と現実の女性達のズレを女性達が少しずつ解消し始めていることや、映画産業のマーケット拡大のため、女性に支持されるテーマを映画の中で取りあげることが必要不可欠になってきていることが考えられる。

終章

かつて男性の視点によって描かれていた映画における女性像は、女性の社会進出に伴い確実に変化してきている。映画『グッドナイトムーン』だけではなく、『エリン・ブロコビッチ』『ハート・オブ・ウーマン』『モンタナの風に吹かれて』『アンカーウーマン』『キューティープロンド』などの現代アメリカ映画に共通して見られるように、より現実的で真実味のある女性の姿を描き出し、人々の生活により密着したテーマを扱っているアメリカ映画が一つのジャンルを確立しつつある。映画と同様に、現実的で真実味のある女性の姿を描き出し、女性の抱えている現実的な問題をテーマとして取りあげるという傾向は、現代のアメリカドラマの中にも見られる。1997年からアメリカで放送され絶大な人気を誇り1998年から日本でも放送されていた『アリー myラブ』（米題『ALLY MCBEAL』）は、第5作まで製作された。若くてチャーミングな主人公アリーは、ハーバード大学卒の27歳新米女弁護士である。このドラマでは、現代の女性達が抱えているセクシャルハラスメントや男性の浮気、結婚、女同士の戦いなどをテーマに取り挙げ、これらの問題に立ち向かうアリーの姿が描き出されている。アリーは、弁護士として訴訟事件を扱いながら、女性としての幸せを探し求める。数多くの出会いと別れを繰り返し、理想と現実のギャップに悩み、傷つき泣きながらも新しい恋や人生に真正面からぶつかっていく。このアリーの等身大のヒロイン像が、多くの同世代女性の共感を集めた。（武藤 2003 : 192）

1960年以降に起きたフェミニズム運動や映画産業のマーケット拡大が、メディアによって描かれる女性像に大きな影響を与え、1980年以降女性達が劇的に社会進出を成し遂げたことにより、かつて男性により支配されていたメディア業界に女性達が参入し始め、男性の視点から描かれていた女性像と現実の女性の姿とのズレが少しずつ解消され始めている。そのため映画における物語の設定や、登場人物はより現実的で真実味のあるものになり、一つの映画ジャンルが確立されつつある。かつて男性の視点から描かれていた女性像に加え、女性のメディア業界への参入により、映画において描かれる女性像に次々と新しい位置付けがなされ、多様化している。しかし、人々の現実認識や意識形成に大きく影響を与えるメディアによって描かれた女性像は、メディアにより描かれた一つの視点に過ぎない。そのため、私達は映画において描かれた女性像をさらに吟味していく必要がある。

参考文献

- 村松泰子, ヒラリア・ゴスマン著 『メディアがつくるジェンダー』新曜社 1998年
- ヘレン・E・フィッシャー著 『女の直感が男社会を覆す』(上)(下)草思社 2000年
- 井上輝子, 上野千鶴子, 三原由美子編 『表現とメディア』岩波書店 1995年
- 内田樹著 『映画の構造分析』—ハリウッド映画で学べる現代思想— 晶文社 2003年
- E・アン・カプラン著, 水田宗子訳 『フィルム・ノワールの女たち』田畑書店 1998年
- 松本侑壬子著 『シネマ女性学』 論創社 2000年
- 岩本憲児, 武田潔, 斉藤綾子編 『[新]映画理論集成』—①歴史/人種/ジェンダー—
フィルムアート社 1998年
- 内田樹著 『女は何を欲望するか?』径書房 2002年
- 千葉敦子著 『アメリカの男と女』彩古書房 1987年
- 長谷川正, ながさわひでゆき, 橋本裕美子, 長谷川桂子, 長田恵子, 吹春規子
出浦美佐著 武藤寿隆編 『アメリカンTVドラマ50年』共同通信社 2003年

参考資料

- 『グッドナイトムーン』 (1998, 米)
監督: クリスコロンバス
出演: ジュリア・ロバーツ/スーザン・サランドン/エド・ハリス
- 『エリンプロコビッチ』 (2000, 米)
監督: スティーブン・ソダーバーグ
出演: ジュリア・ロバーツ/アルバート・フィニー
- 『アンカーウーマン』 (1996, 米)

監督：ジョン・アブネット

出演：ロバート・レッドフォード／ミシェル・ファイファー

『キューティーフロンド』 (2002, 米)

監督：ロバート・ルケティック

出演：リーズ・ウィザースプーン／ルーク・ウィルソン

『モンタナの風に吹かれて』 (1998, 米)

監督：ロバート・レッドフォード

出演：サム・ニール／ロバート・レッドフォード／クリスティン・スコット＝トーマス

『トゥーム・レイダー』 (2001, 米)

監督：サイモン・ウエスト

出演：アンジェリーナ・ジョリー／イアン・グレン／ダニエル・クレイブ

『チャーリーズ・エンジェル』 (2002, 米)

監督：マックG

出演：キャメロン・ディアス／ドリュー・バリモア／ルーシー・リュー

『アリーmyラブ』 (1997, 米)

製作総指揮：デビッド・E・ケリー 脚本：デビッド・E・ケリー

出演：キャリスタ・フロックハート／ギル・ベローズ